

# 御嶽山清水寺蔵『妙法蓮華経』の訓点について

## ——白点資料分析の一方方法——

宇都宮 啓吾

### 一 はじめに

国語史学の分野における訓点資料の価値については周知の如くであるが、重要な位置付けがなされていながら未だその全貌の公開が俟たれる資料も数多く存し、資料の渉獵とその公開自体、今後とも課題になるものと思われる。そのような中で調査・公開に際して特に注意が払われるべき資料の一つとして白点資料が挙げられる。白点資料については従来より指摘されているように、その加点は当初からの備忘的な意味合いや消えることを前提とした加点のために湿気や摩耗によって容易に判別しがたくなるものであり、数百年から千年以上もの時を経て猶その加点が残り判読可能であること自体が稀有と言うべきものと思われる。

稿者は、諸先学の驥尾に付す者として訓点資料の研究を行ない、又、文化財調査の場に居る中で、白点の存在自体は確認できるものの既に判読不可能となった資料に接することも間々存する。そのような中には、先学の紹介によって戦前には「肉眼ではつきり」と見えるとされながら時を経て現在では既に判読不可能と言わざるを得ない資料まで存する。そ

のような事態は訓点資料の研究にとって大きな損失であり、白点資料を如何に扱うか、又、白点資料の調査を如何に記録し公にするかということが今後とも課題になるものと思われる。又、そのことよって従来調査という限られた状態のみによつて確認されてきた資料の再確認も可能になるものと思われる。

そこで、このような問題意識のもと、本稿では、従来、白点の存在自体が気付かれていなかった御嶽山清水寺蔵『妙法蓮華経』に白点の存在を確認し、その意義付けを行なうと共に、先述の問題に対する示唆を行なうことを目的とする。

御嶽山清水寺（現・天台宗）は、兵庫県加東郡社町平木にあり、『今昔物語集』には地藏信仰の霊場として語られるなど、由緒ある古刹（現・西国札所第二十五番）として知られている。この御嶽山清水寺には伝弘法大師筆とされる『妙法蓮華経』巻第五が伝わっており、現在、重要文化財に指定されている。その指定の際には白点等の訓点の存在が指摘さ

れていなかったが、此度の調査の結果、本稿で述べる如く白点が存在し、又、その存在自体注目すべきものであった為、その実態を記録として留める必要を痛感した。



紫外線を照射し撮影したもの

通常の撮影

但し、この白点は剥落が進み、肉眼では全くと言っても良いほどに判読不能であり、又、存在の確認自体も困難であるため、その判読に對しての処置を図ることとした。

その為、今回は特別に、紫外線ライト、所謂「ブラックライト」による調査を行なった。白点の原料となる顔料としては、鉛白（主成分・塩基性炭酸鉛  $2PbCO_3$ ）や胡粉（主成分・炭酸カルシウム  $CaCO_3$ ）等が用いられている。これらは紫外線に反応して肉眼でも確認できる状態となる。

具体的には、鉛白は赤紫色に反応し、胡粉は白色に反応して、描かれた文字や記号等が浮かび上がって来る。その結果、本経においては白点が二種存在することが確認できた。例として、前掲に鉛白の反応箇所を示した。（本稿では、白黒印刷でも判読し易いように当該部分のコントラストを上げる画像処理を行なった。）

また、ごく僅かながら朱点も確認され、本書には三種のヲト点の存在することが知られる。

即ち、本経は従来その存在自体は重要文化財指定という形で知られていながら、白点の存在については未発見の資料であり、白点の有無の確認やその分析・記録化という点で示唆を与えてくれる資料として、又、前述した白点資料の調査・研究において注目されるものと思われる。

二 本經の概要

本經については、既に鈴木景二氏による検討が存するが、今回の調査で新たに得られた知見もあり、氏の論を参考にしつつ、概要を述べていく。

妙法蓮華經提婆達多品第十二  
五  
尔時佛告諸菩薩及天人四衆  
吾於過去無量劫中求法華經  
無有懈倦於多劫中常作國王  
發願求於無上菩提心不退轉  
為欲滿之六波羅密勤行布施  
心無怯惜象馬七珍國城妻子  
奴婢僕從頭目髓腦身肉手足  
不惜軀命時世人民壽命無量  
為於法故捐捨國位委政太子  
擊鼓宣令四方求法誰能為我  
說大乘者吾當終身供給走使

本經は本来、卷子本と考えられるが、冊子本への改装を経て現装は折本装（四周の小口は金泥が塗布）となっており、原装の表紙・巻軸は存しない。現装の表紙は縦25・9 cm、横16・0 cmで、表面は金欄が貼られ、裏面は全面に金箔が施されている。

現装には外題が存在しておらず、内題として「妙法蓮華經提婆達多品第十二」から始まり、「從地踊」出品第十五」までの四品の品名を各品毎に示し、また、巻末に「妙法蓮華經卷第五」と奥題を記している。

書写奥書は見出せないが、表紙と見返しの間には次の如く江戸時代の修理識語が存する。

文政三庚 十一月日

目録

千寿院

法輪院

行事 潮音院

宝物令修復畢

表具師

新助

料紙は穀紙（楮を細かく裁断して麻紙と同様の製法を用いたかと思われる）を黄檗で染めたものであり、一紙長（第二紙）が縦26・3 cm・横17・2 cmで、紙数は全三十七紙である。一面六行で一行十二字、界線は淡墨界で界幅2・7 cm、界高22・9 cm。

書写時期については奥書が存しないために明確にはし難いが、その書

風は大振りで一字一字が力強くゆったりとした天平写経の特徴を持っており、本経の書写時期は奈良時代と考えられる。

本経の伝来については、箱書（二重の桐箱の外側の箱蓋）に「空海之御筆 五卷」（「五卷」は「第巻」を意味するものと思われる）とあることから、弘法大師空海筆として重宝とされてきたことがうかがわれる。また、清水寺において確認できる本経の記事としては清水寺蔵『執行渡物日記』寛文九年（一六六九）条に「弘法大師御筆法華五ノ巻箱入」、また、大永四年（一五二四）から慶長四年（一五九九）までの日記にも「御筆御経箱共二」とあることから、本経はこの頃までには清水寺に伝来されていたものと思われる。

これらのことを踏まえた上で、以下に本書の二種の白点について検討していく。

### 三 鉛白を顔料とする訓点の検討

白点には二種、紫外線によって赤紫色に反応する鉛白（以下、「白点（鉛白）」と称す）と紫外線によって白色に反応する胡粉（以下、「白点（胡粉）」と称す）とが存し、まず、鉛白を顔料とする白点について検討する。

#### 三・一 仮名字体

白点（鉛白）は、全体を通して同一人による一回の加点に基づいているものと思われ、読解に推敲を加えて別訓を加えた箇所も見あたらず、また、明らかな誤写・誤記と覚しい箇所も見出せないため、本点は移点ではなく加点されたものであることが確認される。

白点（鉛白）にはヲコト点を用いておらず、仮名を用いている。その仮名は、次表のように帰納される。

この表によっても知られる如く、本書の白点（鉛白）は万葉仮名本位であり、古体とされる字体も多いことに気付かれる。

古体として「キ」に「キ」に「キ」等の仮名字体を用いている点は、中田祝夫博士が分類される第一群点資料（南都を起源とする）に主として見出せる仮名字体であり、又、その加点の実態が万葉仮名本位であるという点に本書の特徴が存する。

訓点の最初の段階は、春日政治博士によれば万葉仮名本位でヲコト点は未だ使用されていない状態であったとされており、本書の白点（鉛白）はヲコト点を用いない万葉仮名のみ資料であり、平安時代前期の訓点資料としても非常に早い時期の姿を伝えるものと考えられる。

以上のような検討結果から、本書の加点は平安時代前期（九世紀）に南都周辺におけるものと考えられる。

申	疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
申			邪	良		万	ハ ハ ハ	ホ	太	花	す	阿 守
念	疊	物	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
念				利			比	尔 ニ		之 し	支	尹
以	有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
い	る	云 云		田		无	ろ 不			久 頃	久	丸
云	事	奉	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
云		る る		と 夕					え え	せ		
時	時	シ テ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	寸		乎 ふ			も 乙		乃	と ト		こ	

### 三・二 訓読法

次に、本点の訓読法について検討する。その為、まず、本点の加點状態について示すために本書の一部分を例示する。

#### ○翻字本文

護持佛所囑 世尊自当知 濁世<sup>乃</sup>惡比丘<sup>ハ</sup>  
 不知<sup>ラ</sup>仏方便<sup>ト</sup> 随宜<sup>乃</sup>所說法 惡口<sup>シ</sup>而<sup>天</sup>擧<sup>利</sup>盛<sup>利</sup>  
 數數見擯出 遠離<sup>命</sup>於塔寺 如是<sup>シ</sup>等衆惡<sup>毛</sup>

念<sup>乃</sup>仏告勅故 皆当忍是事 諸聚樂城邑  
 其有<sup>尔</sup>求法者 我皆到其所<sup>利</sup> 説<sup>二</sup>仏所囑<sup>一</sup>法  
 我是世尊使 処衆無所畏 我当善説<sup>一</sup>法  
 願仏安穩住 我於世尊前<sup>乃</sup> 諸來十方仏<sup>原</sup>  
 發如是誓言<sup>一</sup> 仏自知<sup>自然</sup>我心<sup>ト</sup> と申

本点の加點状況は詳密とは言えないが、そのおおよそを訓読することは可能となる。

そのことを踏まえて、以下に訓読法について検討していく。

#### 〔助詞「イ」〕

この白点（鉛白）には、助詞「イ」が間々読み添えられていることに注目される。

- 我<sup>イ</sup>闍大乘教
- 龍女<sup>イ</sup>謂智積菩薩尊者舍利弗

この助詞「イ」は『古事記』や『万葉集』といった上代語にも見出される副助詞であり、平安時代前期の訓点資料には必ず用いられるが、平安時代中期以降の仏書に於いては用いられなくなるものである。

#### 〔「言・曰」等の呼応〕

「言」「告」「曰」等によって会話を引用する場合、本書に於いて加點の行なわれている例は孰れも会話の終部に「トイフ（ト云フ）」・「ト申」等の読み添え語が呼応している。このような読み添え語は平安時代前期の訓法において一般的な訓法である。

- 時舍利弗・語龍女言（中略）女身速得成仏
- 白仏言説此經
- 是誓言不実故
- 以偈讚曰（中略）  
ト申

### 「者」字の「ヒト」訓

人物の意を表わす「者」字は平安時代中期以降の仏書に於いては「モノ」訓で訓ずることが一般的となるが、平安時代前期に於いては「人（ヒト）」訓で訓ずることが指摘されている。

本点に於ける「者」字は孰れも次の例の如く「人（ヒト）」訓が加添されている。

- 逆路伽耶陀者亦不親近
- 成就此第四法者説是法時

また、「者」字が無く、文脈上、読み添える場合にも「人（ヒト）」訓が読み添えられ、「モノ」訓は用いられていない。

- 造世俗文筆讚詠外書

### 「當」字の訓読

後世の漢文訓読において「當」字と再読されるが、本書に於いては次の例の如く、「當」字を「マサニ」と訓じて下の用言を平叙する形式となっており、古い訓法と考えられる。

- 如是无量大菩薩衆当成阿耨多羅三藐三菩提

### 「読み添え訓」「ニテ」

接続助字「テ」が形容詞や形容動詞、又、同じ形式で活用する助動詞に承接する際、本書に於いては「クテ」「ニテ」「ズテ」の形式で読み添えられ、「クシテ」「ニシテ」「ズシテ」の形式は見出せられない。

一般に、訓点資料では平安時代の和文と二項対立する形で、和文の「くて」「にて」「ずて」に対して「クシテ」「ニシテ」「ズシテ」の形が用いられるとされるが、『万葉集』では両形が存し、平安時代前期の訓点資料に於いては中期以降の訓点資料とは異なり、「クテ」「ニテ」「ズテ」が存したと考えられる。

- 我於海中唯常宣説妙法蓮華經
- 云何女身速得成仏

### 「如是等」の訓読

「如是等」は後世に於いて「カクノゴトキラ」と即字的に訓ずることが知られているが、本書に於いては返点の存在から、「是等（ノ）如（キ）」と訓じており、後世の一般的な訓法とは異なっていることが知られ、後世に於いて固定化する以前の訓法と考えられる。

- 如是等衆患

以上、白点（鉛白）の訓法について特徴的なものを検討した結果、本点は平安時代前期の訓法を伝えていることが知られ、万葉仮名本位の加

点やその字体等を考慮に入れることで平安時代前期の中でも、非常に早い時期の訓読を反映しているものと考えられる。

### 三・三 和訓

本書においては以下のような語彙が存する。

- 赤子阿可婆太
- 閑處之川可也
- 相一撲須方比
- 相一撲取方比
- 相一撲取方比
- 改獵可利
- 見乃阿太利

### 三・四 注釈

本書においては注釈として以下の如き例が存する。

- 梵志尼撻子離繫子
- 路伽耶陀順世外道
- 逆路伽耶陀反順世外道
- 那羅文畫其身之輩

これらの注釈は、慈恩大師窺の『法華經音訓』・『法華經玄贊』の記述と一致する。

- 梵志尼撻子 離繫子
- 路伽耶陀 順世外道
- 逆路伽耶陀 反順世外道
- 那羅 文畫其身之輩

平安前期の法華經訓読に『法華經音訓』・『法華經玄贊』を用いることについては、元興寺明詮の訓読を伝える立本寺本『妙法蓮華經』巻第五にも同様の注釈が以下の如く存し、平安時代前期の南都における『妙法蓮華經』訓読の一つのあり方と考えられる。<sup>9)</sup>

- 路伽耶陀順世外道
- 逆路伽耶陀反順世外道

### 四 胡粉を顔料とする白点の検討

次に、胡粉を顔料とする白点について検討する。

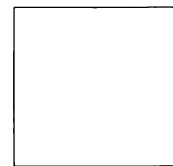
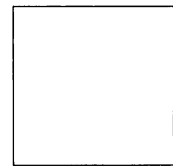
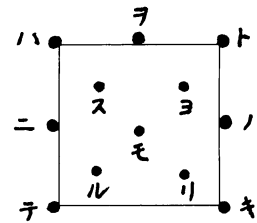
白点（胡粉）についても、全体を通して同一人による一回の加点に基づいているものと思われ、読解に推敲を加えて別訓を加えた箇所も見あたらず、また、明らかな誤写・誤記と覚しい箇所も見出せない。この点を踏まえた上で、以下に検討を加えていく。

#### 四・一 ヲコト点と仮名字体

白点（胡粉）には、ヲコト点と仮名を用いている。それぞれ、次表のように帰納される。

仮名字体には万葉仮名も用いられているが新しい字体も存在し、平安時代前期後半頃の特徴を有していることが窺われる。また、「ミ」の字体に「立」などの字体を用いていることは、本点が東大寺系統であることを示している。

申	疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
				ラ			は ハ		太		カ	
念	疊	物	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
				リ		ム				い		尹
以	有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
						ム			ル	久	久	宇
云	事	奉	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
						女	つ					
	時	シテ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
								乃	ト		乙	



このことは、ヲコト点からも窺われ、ヲコト点の形式が壺の左下から時計回りに順に「テニハヲトノキ」となることから中田祝夫博士の分類で第三群点に分類され、第一壺については、東大寺点と一致していることに気付かれる。しかし、本点においては東大寺点の第二壺以降、即ち「ノ人ノ」＋「七フ」等の符号は用いられておらず、本点は東大寺点の段階にまでは発達していないものと考えられる。東大寺点については、その最古の例が石山寺蔵『大智度論』天慶元年（九三八）点とされており、本点の加点はそれよりも早い時期のものと考えられ、先の仮名字体の検討で述べた平安時代前期の訓点を伝えているという指摘に矛盾しないことが知られる。また、ヲコト点が第三群点であることも南都東大寺系統であることを窺わせる。

#### 四・二 訓読法

先述の白点（鉛白）と同様に、本点の加点状態について示すために本書の一部分を例示する。

○翻字本文

常<sup>に</sup>有<sup>ム</sup>是<sup>の</sup>好<sup>ム</sup>夢<sup>を</sup> 又<sup>て</sup>夢<sup>作</sup> 國<sup>王</sup> 捨<sup>て</sup> 宮<sup>殿</sup>眷<sup>屬</sup> 及<sup>上</sup>妙<sup>五</sup>欲<sup>を</sup> 行<sup>ヒ</sup> 詣<sup>於</sup>道<sup>場</sup> 在<sup>て</sup> 菩<sup>提</sup>樹<sup>の</sup>下<sup>に</sup> 而<sup>處</sup> 師<sup>子</sup>座<sup>の</sup>に 求<sup>道</sup> 過<sup>七</sup>日<sup>を</sup> 處<sup>得</sup> 諸<sup>佛</sup>之<sup>智</sup> 成<sup>無</sup>上<sup>道</sup>已<sup>て</sup> 起<sup>て</sup> 而<sup>轉</sup>法<sup>輪</sup> 爲<sup>四</sup>衆<sup>說</sup>法<sup>を</sup> 經<sup>千</sup>萬<sup>億</sup>劫<sup>を</sup> 說<sup>無</sup>漏<sup>妙</sup>法<sup>を</sup> 度<sup>無</sup>量<sup>衆</sup>生<sup>を</sup> 後<sup>當</sup>入<sup>涅槃</sup> 如<sup>烟</sup>盡<sup>燈</sup>滅<sup>若</sup>後<sup>惡</sup>世<sup>中</sup> 說<sup>是</sup>第<sup>一</sup>法<sup>是</sup> 人<sup>得</sup>大<sup>利</sup> 如<sup>上</sup>諸<sup>の</sup>功<sup>德</sup>

本点の加点状態は、先述の白点（鉛白）に比して詳細であることが知られ、その大凡を訓読することが可能となる。

又、本点の特徴としては、まず、返点「□□□□」が詳細であることに気付かれる。返点「□□□□」の如き符号を用いることは、平安時代前期の訓点資料に限られており、平安時代中期以降はこのような符号がなく、「上中下」の形式へと変わって行き、受ける形の無い「□□□□」の形式のみが平安時代中期の訓点資料でヲコト点に乙点図の方式を用いるもののみに残るに過ぎないとされている<sup>⑩</sup>。この点でも本点が平安時代前期の特徴を伝えていることが知られる。更に、本点の如く平安時代前期の訓点資料の中で「□□□□」形式の返点を用いた資料としては新薬師寺蔵『妙法蓮華經』等が存するが、それらの資料と比較しても

本書の返点が詳細であることは特徴的な事象と考えられる。

次に、訓読法の分析のために特徴的な事象について検討していく。

そのうち、以下の例については、先述の白点（鉛白）に於いても見出された平安時代前期に特徴的な訓法である為、詳述は省くが、本点に於いても同様の例の存することを述べておく。

〔助詞「イ」〕

● 其眷屬皆大歡喜<sup>て</sup>

〔「者」字の「ヒト」訓〕

● 求辟支仏者<sup>人</sup>

以上の他にも特徴的な訓法として以下の如き例が存する。

〔読み添え訓「クアレ・ズアレ」〕

「ナシ」の活用形「ナカレ」や「ズ」の活用形「ザレ」の形ではなく、古形とされる「クアレ」「ズアレ」が本点においては使用されている

● 又復於法無所行<sup>ケレ</sup>

● 又不親近旃陀羅及畜猪羊狗（中略）諸惡律儀<sup>テ</sup>

〔並列の助字「并・及」の訓読〕

語の並列を示す「及」字については、本点では不読として「及」字の前後の語に「ト……ト」を読み添える形が主となっている。

● 爾時摩訶波闍波提比丘尼及耶輸陀羅比丘尼并其眷屬<sup>ト</sup>

一般に右の形式が古く、「及」字を「オヨビ」訓で訓ずることが平安時代中期以降定着して行く。但し、平安時代前期に於いても「オヨビ」訓は僅かながら存し、本点における次の「オヨビ」訓の例も、そういった早い時期の例と考えられ、本点の訓法が平安時代前期の訓法を反映しているということに矛盾しない。

- 若有比丘及比丘尼 諸優婆塞 及優婆夷 国王王子

又、同じ箇所には並列を表す「并」字を「アハセテ」と訓読したと覚しい例が存する。この字は後代には「ナラビニ」と訓読されるものであり、本点が古い訓法を用いていることが知られる。

- 爾時摩訶波闍波提比丘尼及耶輸陀羅比丘尼并其眷屬

以上、白点（胡粉）の訓法について特徴的な訓法を検討した結果、本点も白点（鉛白）と同様、平安時代前期の訓法を伝えていることが知られる。但し、仮名字体の検討でも述べた如く、本書の訓法についても「オヨビ」訓の存在の如く、白点（鉛白）より若干時代の降る平安時代前期後半頃の実態を示しているものと思われる。

#### 四・三 和訓

本点における和訓の主なものを以下に挙げる。

〔実詞訓〕

轉次 <small>クワシ</small>	慮 <small>オモヒ</small>	仮名 <small>カリナ</small>	好 <small>コノミ</small>
辱 <small>ハツカケ</small>	観 <small>ミ</small>	名 <small>ナ</small>	屏 <small>カドヒラ</small>
已来 <small>コノカマ</small>	諸佛 <small>のミモトニ</small>	楽 <small>オカセ</small>	髮 <small>カミ</small>

又、その他に類音字表記の例が一例存する。

〔類音字表記〕

寡女カウメ

#### 四・四 白点の時代認定の問題

今までの検討によって、本書における白点は孰れもが平安時代前期の訓読の実態を反映していることが知られた。

そのうち、白点（鉛白）については『日本書紀』六九二年条によれば元興寺僧観成が中国の文献に基づいて鉛白粉を作成したことが知られる。

○戊戌、賜沙門観成、絹十五匹・綿卅屯・布五十端。美其所造鉛粉。

この時の鉛白粉は化粧の顔料として作成されたものと考えられるが、この顔料が絵画や文字等の記入に用いられるようになることは想像に難くない。

この点については、実際に、正倉院に「白墨」の蔵されていることが知られており（昭和62年 奈良国立博物館出展）、奈良国立博物館出展時の説明によれば「材質は奈良時代以降、白土と共に白色顔料として多用された鉛白を塗り固めたものと考えられ、硯ですり、もっぱら経巻などの誤字の訂正や注記に用いられた」とあり、白点の顔料としての鉛白が「白墨」として現存していることが確認される（最近では『週間朝日百科 皇室の名宝』（平11・5 朝日新聞社）「正倉院 文書と経巻」一五五頁にも掲載）。

その一方で、白点の顔料としての胡粉については、その使用の起源がいつであるのかについては明らかにされていない。近年における胡粉使用の分析については蛍光X線による国宝『源氏物語絵巻』の分析が存し、そこに白色顔料としての胡粉の使用されていることが確認され、胡粉の使用が平安時代後期（11世紀前半頃）まで遡ることが窺われる<sup>①</sup>。但し、この胡粉の使用については、従来説から当時の使用とは見なさず後世の修復とする向きもあり一層の検討が必要となる。そのような現在の研究の中からすれば、平安時代前期における胡粉の使用例は確認されておらず、本書の白点（胡粉）が加<sup>レ</sup>点として、本書の白点（胡粉）を胡粉使用の最古の例として平安時代前期にまで遡らせることには尚一層の検討と慎重な態度が必要になるものと思われる。もしも、胡粉の使用が降る時代のみにはか存しないということであれば、胡粉の白点については、言語事象が平安時代前期であっても、忠実な移点である可能性すら起こってくるからである。（但し、そこには、平安時代前期における備忘的、消すことを前提とした“一時的な加点を敢えて移点することが特別な事情を除

いて存在するか否かという問題もここでは考え合わせる必要も存ずる。）訓点資料が加点であるのか移点であるのかは、仮名字体やヲト点の様式、運筆の勢い、又、明らかな誤り（特に写し間違いに起因する誤写）の有無によって検討する。しかし、正確・忠実な移点の場合には明らかな誤写も無く、加点であるか移点であるかは判別し難いものとなり、ましてや、訓点という僅かな余白における書き込みであれば運筆の勢いも現われにくく、又、白点のように判読し難い場合、加点が移点かの判断は非常に困難なものとなる。その為、この胡粉の使用時期の解明は非常に大きな問題を含んでおり、今後の白点資料の分析の蓄積が必要となり、今後とも更に検討すべき課題と考えられる。

その為、本書の白点（胡粉）も、その移点の可能性として平安時代後期頃を下限としながらも、言語事象としては平安時代前期後半頃であることを述べておきたい。

## 五 法華経点本上の位置

従来報告されている平安時代前期の訓読を伝える『妙法蓮華経』点本としては、以下のものが挙げられる。

- 1 新薬師寺蔵本 八巻 白点（平安時代前期）
- 2 日本大学総合図書館蔵本 一卷 白点（平安時代前期 第一群点）
- 3 大東急記念文庫蔵本 白点（平安時代前期 特殊点甲類 夾注本）
- 4 天理図書館蔵本 一卷 白点（平安時代前期 特殊点甲類 夾注本）

5 京都国立博物館蔵本 一卷 白点（平安時代前期 第三群点 奈良朝写経）

6 立本寺蔵本 六卷 朱点（平安時代後期の移点ながら異説として元興寺明詮の訓読を伝える。この写しとして、千手寺蔵本が存する。）

7 唐招提寺蔵本 一卷 白点（平安時代前期 第三群点）

8 京都国立博物館蔵本 八卷 白・朱点（平安時代前期 第一群点

奈良朝写経）

これらのうち、巻第五が存するものとしては新薬師寺蔵本・京都国立博物館蔵本・立本寺蔵本であり、これらの訓読と本書の訓読とを比較することが必要となるが、この問題は別に法華経訓読全般の問題として検討することとしたい。

但し、大まかなことを述べるならば、平安時代前期の加点になる『妙法蓮華経』の中で本書の白点（鉛白）のみがヲコト点を有しない万葉仮名本位の加点であることには注意してよいものと思われる。

先述した如く、訓点の最初の段階は、万葉仮名本位でヲコト点は未だ使用されていない状態であったとされており、本書の白点（鉛白）はヲコト点を用いない万葉仮名のみ資料であり、『妙法蓮華経』訓読の点本の中でも最も古いものの一つとして位置付けることが可能であると考えられ、また、平安時代前期の訓点資料としても非常に早い時期の姿を伝えるものと考えられる。

その意味で、本書の白点（鉛白）は『妙法蓮華経』訓読のみならず、漢文訓読の歴史の上でも重要な資料であることが知られる。

また、白点（胡粉）についても、平安時代後期を下限とする移点の可能性を含みつつ、その訓読の実態は平安時代前期後半頃の訓読を伝え、『妙法蓮華経』訓読の資料の中でも同じ第三群点の資料とされる京都国立博物館蔵本とヲコト点の形式を異にしており、『妙法蓮華経』訓読の資料として、新たな知見を得ることができるものと考えられる。

## 六 白点資料分析の一方法として

前項までで本書の言語の実態について述べてきた。このことを踏まえた上で、更に、本書の調査自体から得られた知見についても述べてみたい。

本経の僚卷については、前掲の鈴木景二氏によって和泉市久保惣記念美術館所蔵の巻第三粟草喩品第五（七紙）、個人所蔵の巻第三化城喩品第七（断簡）、神谷正太郎氏所蔵（安田文庫旧蔵）の巻第四五百弟子受記品第八（八紙半）、京都国立博物館所蔵（守屋コレクション）の巻第四法師品第十（五紙）がその書風や料紙の観点から本経の僚卷と指摘されている。

そのうち、京都国立博物館所蔵本については、紫外線ライトによって本経と同様の訓点（鉛白・胡粉）の存することが確認され、書風や料紙のみならず訓点によっても僚卷であることが確認された。この点からするならば、僚卷の孰れにも訓点が施されているものと予想され、これらを総合的に調査することによって平安前期の法華経訓読資料が更に加わることになる。

従来、訓点資料の加点を特殊光線によって「浮かび上がらせる」とい

う試みは角筆点の分析において試みられているが、顔料の成分分析における特殊光線の利用は文化財科学（保存科学）の分野における試みを除けば行なわれておらず、この「見過ごされてきた（見えない）文字を浮かび上がらせる」という試みは、肉眼では確認しがたい白点資料の確認・記録に有効な手段と考えられる。そして、特殊光線の問題については、先述の如く、文化財科学（保存科学）の分野で蛍光X線や赤外線・紫外線の利用などの種々の手法が取られており、訓点資料を如何に分析するかという点ではこういった科学的手法の導入と云うことも今後は視座に入れる必要が存するものと思われる。

## 七 おわりに

以上、本稿においては、従来その加点自体が確認されていなかった御嶽山清水寺蔵『妙法蓮華経』に特殊光線を用いることで白点の存在が明らかとなったことを指摘し、その言語の実態について明らかにすると共に、今回の試みから白点資料分析の方法に関する特殊光線利用の可能性について述べてきた。

近年の科学技術の進歩と共に様々なスキルが生み出され、今後とも訓点資料の調査や研究にも活用されるべきものと思われ、そのような視点から本稿を述べてきた。

又、初めにも述べた如く白点資料はその保存自体が非常に困難であり、その実態の記録も果たされるべき課題と考えられ、この点に關しても白点を浮かび上がらせる手法を述べた本稿は手懸かりになるものと思われ

る。その意味で、この問題についても更に検討していきたい。

## 【注】

- ① 今回は文化財調査の一環として、特に紫外線ライトを使用することとなったが本来、紫外線は文化財にとって好ましいものではなく、今後、別の方法を考える必要が存する。
  - ② 本書に於いては一カ所のみ口の位置にあり、本稿の結果から第三群点を付したものと考えられるが、本稿では対象としない。
  - ③ 鈴木景二「播磨清水寺所蔵の天平写経―新出の大法華経卷第五―」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』No.484 平3・7)
  - ④ 此度の調査後に題簽として「妙法蓮華経卷第五」を貼付されたとの由である。
  - ⑤ 中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」(昭29・5 改訂 昭54・昭11 勉誠社)
  - ⑥ 春日政治「片仮名の研究」・「初期点法例」『著作集』第一・第六 中田祝夫「古点本の国語学的研究」
  - ⑦ 門前正彦「漢文訓読史上の一問題―ヒトよりモノへ―」『訓点語と訓点資料』第1
  - ⑧ 小林芳規「新薬師寺薬師如来像納入妙法蓮華経の平安初期訓点について」(『南都佛教』38 昭和52・5)
  - ⑨ この問題については、拙稿「千手寺本『妙法蓮華経』紙背注記の国語学的価値について―『妙法蓮華経』明詮点の書き入れ注記に注目して―」(『千手寺本『妙法蓮華経』紙背注記』大谷女子大学資料館報告書35 平9・3) において述べたことがある。
  - ⑩ 小林芳規「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』第54 昭49・5)
- ⑪ この「白墨」については石田茂作博士が正倉院御物に關して「奈良時代文化雑攻」の中で「文房具類では、筆・墨・白墨、この白墨といふのはチョークとは違つて白いことは白いが、硯で磨つて使ふものである。お経の写し違へなどを直す時に使つたものらしく、古い写本を見るとよくわかる。今のチョークより少し細長いものになつて残つてゐる。」と指摘されている。中田祝夫博士は『古点本の国語学的研究 総論篇』(98頁)で、このような白墨が白点に用いられたことを既に指摘されているが、そこではその顔料を胡粉とされている。現在の科学的手法から白墨が主成分を鉛白とすることが知られ、また、本稿の指摘の如く、白点は古いものが鉛白、新しいものが胡粉であることを指摘してきた。

- ⑫ 早川泰弘、平尾良光、三浦定俊、四辻秀紀、徳川義崇、名児耶明「国宝源氏物語絵巻にみられる彩色材料について」『保存科学』41 平14・1
- ⑬ 本書は立本寺蔵本の忠実な移点本であり、全八巻が存するため、立本寺本の欠を補うことが可能となる。また、立本寺蔵本には紙背にも明詮の註記が存在するが、現在では裏打ちがされているためにその記述を確認することが困難である。そのため、この箇所については千手寺蔵本によって確認することが必要となる。この紙背註記については前掲の拙稿『千手寺本『妙法蓮華経』紙背註記』大谷女子大学資料館報告書35 平9・3)において影印と翻刻とを公表した。
- ⑭ 春日政治「片仮名の研究」・「初期点法例」『著作集』第一・第六  
中田祝夫『古点本の国語学的研究』
- ⑮ この点については、単に研究に資するだけでなく、文化財修復や文化財保護の視点(留意点)としても注意すべきものと思われる。

## 【付記】

調査・成稿に際しては清水寺御住職清水谷善英師よりご高配を賜わり、調査に際しては京都国立博物館保存修理指導室長赤尾栄慶氏並びに宇佐美松鶴堂の方々よりご厚情を賜わった。記して御礼申し上げる次第である。

本稿は平成十五年度文部科学省科学研究費若手研究(B)「西教寺並びに法勝寺関係聖教における訓点資料の基礎的研究」の成果である。

〔うつつのみや けいこ、大谷女子大学助教授〕

(平成十六年三月十八日受理)